

2025年4月1日

立教大学国際学術研究交流制度
2024年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	異文化コミュニケーション学部・特別専任教授
氏名	武田 珂代子
派遣機関名	Institute of Japanese Studies, Seminar of East Asian Studies, Department of History and Cultural Studies, Freie Universität Berlin 所在国：ドイツ
研究テーマ	戦争記憶の継承における翻訳の役割
派遣期間	2025年2月14日～2025年3月16日（31日間）
研究経費	875,230円

2. 派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）〇〇に関する調査、〇〇氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2025年2月14日	離日
2025年2月15日	ベルリン到着、研究調査の準備
2025年2月17日	ベルリン自由大学日本学研究所でマティアス・ザックマン教授およびエレナ・ヤリノス教授と共にオリエンテーション的打ち合わせ。
2025年2月18日	ケリー・マドックス博士と互いの研究進捗を共有し討議
2025年2月19日 -21日	韓国学研究所主催の韓国映画シンポジウムに参加。韓国学研究所所長からドイツにおける韓国研究などについて聞き取り
2025年2月23日	「平和の少女像」、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」を見学・資料収集
2025年2月25日	日独センターでコーネリア・ライヤー博士の新著発表会に参加
2025年2月26日	ドイツ抵抗運動記念館を見学・資料収集
2025年2月28日	ザックマン教授およびマドックス博士と書籍刊行の内容などを討議
2025年3月1日	ユダヤ博物館ガイドツアーに参加・資料収集
2025年3月3日	ドイツ歴史博物館ガイドツアーに参加・資料収集
2025年3月4日	「テロのトポグラフィー」を見学・資料収集
2025年3月5日	プロエツェンジエメモリアルセンターを見学・資料収集
2025年3月7日	シュタージ博物館ガイドツアーに参加・資料収集
2025年3月8日	ベルリンの壁博物館を見学・資料収集

2025年3月10日	ヤリノス教授と多和田葉子、小川洋子の翻訳などを討議
2025年3月11日	連邦議会議事堂で歴史のレクチャーに参加。森鷗外記念館でノラ・バルテルス学芸員から鷗外作品の翻訳などについて聞き取り・資料収集
2025年3月12日	報告者の研究調査活動、今後の研究協力について、マドックス博士およびライヤー博士と討議
2025年3月13日	フンボルトフォーラムを見学・資料収集
2025年3月16日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

派遣研究員としての活動目的は、ドイツが関わった20世紀の戦争・冷戦の記憶・言説が翻訳を通してどのように発信されているかについて調査研究することだった。実際、博物館・記念館など現場での調査と資料の収集、受容者の観察、関係者への聞き取り、研究者との討議を通して、有用な情報や洞察を得ることができ、充実した日々を送ることができた。具体的には、戦争・冷戦の記憶・言説すべてが良質な英訳および英語でのガイドで発信されていること、日本語を含むその他の言語への翻訳は限定的で、一部で複数言語に訳されたパンフレットや音声ガイドのみがあること、点字や手話を通した展示物の情報発信もあることが確認できた。以上の点については、これから考察を深めていきたい。また、「平和の少女像」に関しては、大学などに向けて在ベルリン日本大使館による立場説明的活動が行われているといった興味深い情報も得た。

概して、ベルリンでは二つの大戦や東西分裂の記録（特にナチスによるユダヤ人迫害・虐殺と東ドイツ秘密警察による国民の監視や抑圧に関するもの）が包括的かつ詳細に保存され、ドイツ国民だけでなく、翻訳を通して隣国その他の国・地域からの訪問者にも伝えていくという徹底した努力が絶え間なく続いていると感じた。同時に、過去に向き合う姿勢や取り組みにおける日本の状況との違いを考えざるを得なかった。また、極右が台頭するドイツその他ヨーロッパの国々の状況、独裁主義的政治状況の中で民主主義が脅かされている米国の状況についても、ベルリンで継承されてきた戦争・冷戦の記憶に引きつけながら、その危険性を考察する道筋についても検討することとなった。

上記以外のトピックに関しても、ベルリン自由大学日本学研究所のメンバーと情報や意見を交換することができた。授業がない時期だったので学生と交流できなかったことは残念だったが、ザックマン教授・マドックス博士とは、同教授が主導する研究プロジェクト（Law without Mercy: Japanese Courts-Martial and Military Courts During the Asia-Pacific War）が2024年9月に主催したコンファレンスで報告者が行った研究発表を中心に、同コンファレンスに基づく書籍刊行の準備などについて討議した。また、日本文学研究者であるヤリノス教授からは、多和田葉子・小川洋子などの作品の翻訳について知見を共有していただき、興味深い意見交換ができた。さらに、ライヤー博士は、九州地方の人々の生活や移住などをテーマにした新著について、同テーマに関する報告者の観察などを踏まえて、情報の共有と意見交換をした。また、ライヤー博士が編集者として数年前に刊行した日本研究の方法論に関する書籍についても、その背景や内容についてお話を伺えた。

今後、ザックマン教授・マドックス博士とは、書籍刊行に向けて協力関係を継続していく。また、ライヤー博士には、日本研究の方法論に関する講演を2025年9月に立教大学異文化コミュニケーション研究科でしていただけるよう、現在計画中である。派遣研究員としての活動が、このような催しに繋がりそうなことを嬉しく思う。